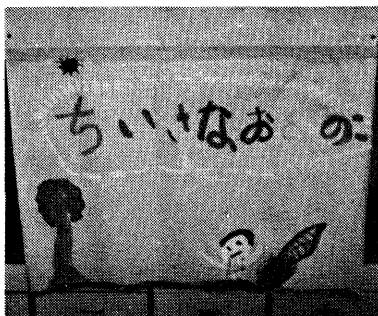


こどもたちの紙芝居



田中都慈子

こどもたちは、あの小さなからだのどこにあの活動力を秘めているのだらう。おとなたちは、自分たちがこどもだった時があったことをしばしば忘れ、無理な注文をしたり、大事なことをとり落としていることがある。

今、三歳、四歳、五歳と受けもち、考えることは、今までこどもたちが経験し、体験してきたことが、ほんのささいなことであってもこどもたちの成長に大事なことだったということである。最近の活動を例にとってみよう。それは、こどもたちが、話をつくり、それが絵本となって、それをもとに紙芝居をつかって誕生会に演じたことである。

経過

十月二十二日 十名（うち女児三名）が、少しずつ話を続けて「小さな男の子」という話をつくった。（42ページ参照）降園時にクラス全体にその話をきかせ、楽しむ。

十一月二日 絵本にしようという意見がでる。

十一月十六日 Mが紙を切って本の大きさを決める。（16.5 cm × 11.5 cm 13ページ）教師が字をかき、数人のこどもたちが集まり自分のかきたいページの絵を色鉛筆でかき、一冊に仕上げてとじる。絵をかかなかったこどもでもでき上がった絵本をみる。

十月二十二日 十一名のこどもが「小さな小さなおいも」の話を つくる。

十一月十八日 九名のこどもが「大きな男の子と大きな女の子」をつくる。

順次、絵本になる。

しばらくの間、その三冊の絵本は、こどもたちの間でぐるぐると回され、読んだり見たりして楽しむ。

十一月のお誕生会にぜひその話をききたいということがもち上がり、紙芝居にしてみせることになる。そこでこどもたちと相談をした。

十一月十八日 三つの話のうち、どの話をするかを決める。結局多数決がよいということになり、結果は「小さな男の子」に決まった。

(入園テストその他で十九、二十三日休園)

十一月二十四日 第二回相談

どのように紙芝居にしたらよいか、教師側としては考えをもっていたが、表面には出さないうで、こどもたちの意見をきく。

こどもたちの意見は、次の通りである。

・ 絵の裏に絵本の頁をはる(話をする人のために)

・ 絵の裏に字をかく

・ 黒板に字をかいておく

・ 話をしない人が、紙をめくればよい

・ 話をしない人が、絵の裏に字をかけばよい

・ 赤白(運動会の時の)に分かれて話をするのと絵をかくに分かれる

・ 赤白に分かれてじゃんけんをして勝った方が、話をする方になるか絵をかく方になるかえらぶ

・ 話をいう人は、絵本の紙をもって話せばよい

・ 赤白に分かれて一番前の人が、じゃんけんをしてどちらかを決める

そこで、最後に次の二つのことで多数決にしたらよいことになる。

① 全員が、絵をかき、話をする。

② 半数が、絵をかき、半数が、話をする。(この場合は、

赤白に分かれて、勝った方の一番前の人が、どちらにするか決める)

多数決の結果

① 二十六名

② 七名

③ どちらでもよい 一名

大歓声のうちに①に決まり、②③に手を上げたこともも納得する。そして、全員が話すことができないので、話をしない人は、めくる係になればよいという意見がでて、みんな賛成する。

次に、絵は二人組でかく。一緒にかきたい友だちと二人一組になる。その二人の中で、話をする人とめくる係とを決めさせる。そしてどの場面をどの組がかくかを定める。それから、絵の具やクレヨンの色が目立つように、うすいクリーム、ピンク、きみどり、白の四色の紙を使うことを知らせる。

表紙と裏を入れて十六画面にする。絵本をもとにするとは、いわなくても子どもたちは、とてもよくわかっていった。相談に要した時間は、一時間余りだったことが後でわかり、びっくりする。

十一月二十五日

登園後、かきたいグループから、かきはじめる。各グループとも、組んだ相手と相談をして、紙の色をえらび、教師は何もいわないのに、絵本の中から自分のかくページをはずし

て、どうかくか相談をしてかいている。

十二枚が出来上がった。

降園時に、絵の片すみにページ数をかき入れ、めくるようにまとめることを話す。(教師としては、間に合うかどうかとても心配)

十一月二十六日

残りの絵四枚をかきあげる。話をする人だけ集めて、自分の場面の話を覚えさせ、順番にやってみる。

降園前に誕生会をするホールへ行き、舞台の上で、マイクを使い、クラスのコどもたちの前で本番と同じように、練習をする。(明日が本番で、果たしてことばを覚えているか心配。きちんと同じ、用意をする。)

十一月二十七日 誕生会当日

全員舞台のわきの廊下に場面の順番に並ばせ、自分の番が済んだら席にもどることを約束する。コどもたちは、きちんと順番に並び、ことばも忘れずにマイクの前で話をする。みている年少組も熱心にみてくれる。

結果

教師の心配もよそに四日間で紙芝居の製作ができたことは、

一つの驚きであった。もっと日数があつたらもつといいものが……ということを考える前に、こどもたちが、わずかな日数の中で、相談をし、まとめ、絵を協力してかき、自分の役割を知り、実行できたという満足感を味わったことが、大きな成果だったように思う。

誕生会の当日、どうしてもママに見てもらいたいといつてせがんで、みにきてもらったこどももいた。今までの経験の積み重なりがそうさせたといつてしまえば、一言ですんでしまうが、ここで、どんなことが（要素が）、この結果を生んだかをみたいと思う。そこには失敗や、やりとげずに終わってしまったこと、何人かのこどもだけが経験し、全員にゆき渡らなかったこと、計画倒れで終わってしまったことも何らかの刺激になっていたようだ。三年間の二度の組がえも、一つの要素になっているかもしれない。

結果の考察

何がその結果を生んだか、最終的な結果はもちろん導けないが、考えられる大きな活動を思いおこしてみると、

- 短い歌をつくったり、友だちと活発に遊ぶ。（三歳児）
- 「おじいさんのふしぎなポケット」の話を全員でつくり、

げきをする人と解説をする人に分かれてこども会にする。

（四歳児三学期）

- 羽田空港見学から発展したのりものごっこが町づくりになる。そして役割を決めて年長組二クラス合作で展覧会をし、年少組や母親をお客さまによぶ。一ヵ月余り続く。（五歳児一学期）

- 夏休みの生活発表を一人ずつする。（五歳児二学期）

- 運動会の会場づくりの手伝いで入退場門をどのようなものにするか年長組二クラスで相談し、製作を手伝う。（五歳児二学期）

○その他

運動会の練習、ことばあそび、一冊の本（童話）を毎日少しずつ話をきくなど。

以上は、具体的な例であるが、それに含まれていない活動が、大きな力をもっているように思われる。

活動をしている時のこどもたちの真剣な態度と熱中しているはりきった毎日。こどもたちみんなが一つの方向、目的を考えを傾けて協力できたことが、この紙芝居づくりのなによりうれしいことであった。

ちいさなおとこのこ

1 ちいさなちいさなおとこのこが、ちいさなちいさなどんぐりをひろいました。

2 おとこのこは、もっともっとちいさくなってありんこみたいになってじぶんよりおきなどんぐりをひろいました。

3 もっともっとおとこのこがちいさくなくてもっともっとちいさなどんぐりをひろいました。

4 にんげんがとおったので、おとこのこはかくれました。ふつうのにんげんがかいじゅうみたいにおおきくみえました。

5 おとこのこが、もっとちいさくなって、どんぐりがもっともおおきくなってどんぐりにあなをあけたらおとこのこがはいれるようになりました。そこでどんぐりでうちをつくりました。

6 おとこのこがうちからでてきたら、あつというまにほうきではかれてしまいました。ふつうのにんげんがほうきで

7 はいたので、おとこのこはとんでいてしまいました。おとこのこはとんでいて、おはなのうえにおっこちました。

8 おはなからでてみつをくんでのみました。くきからおりてどんぐりのうちにかえりました。

9 なにかたべたくなっておさをだしてバナナをたべました。ごはんをたべてあめをなめてどんどんふとってきてからだ

12 ふとってきたのでぶたみたいになりました。

13 かいじゅうエレキングがでてきて、おとこのこはふんづけられてしまいました。

14 どんぐりのうちがおおきくなってわけてしまいました。

